

可觀小説卷四十七

一、天竺德兵衛入道宗心の筆記

高砂の船頭徳兵衛と云もの、生年十五歳より天竺國へ再三渡船し、長崎より唐土天竺迄の、道程・海陸・風土・産物等有増覺書致し候。異名を天竺徳兵衛と呼申候。老年に及て宗心と稱す。攝州大坂上塩町に居住す。寶永四年に行年八十九歳達者存命也。

一、古は日本より商人御免にて天竺と賣買仕候故、角倉與一郎殿・茶屋四郎次郎殿・平野平次郎殿・籠屋・江屋、是等の衆渡天を御免の商人也。徳兵衛云。私儀は角倉與一郎殿の商船の船頭前橋清兵衛に雇はれ、十五歳の時長崎を出船渡天致し候。長崎より雌嶋・雄嶋迄九十六里、雌島・雄島より東寧迄六百五十里。東寧ともと申國、長さ七百五十里、此國の都口より十三里計沖に、ウクウ・タグンと云嶋二つあり。是迄は日本を南へ走り候。東寧より六百五十里西へ走り候へば、廣東の口阿媽港と申所を見たて申候。此阿媽港の海の深き事、九百八十尋あるよし。此所の海勝れて深く候て、

碇も中々おろされず候由。此所の南の方に大くると申星出申候。此所迄は日本の北斗星を、是より時計を以て方角を窺ひはしり候。此所に大くると小くると申小星あり。一、阿媽港より三百里南へ走り、ヒヤウノハナと申所を見て參候へば、南京の界のはな也。此より三百里西へ走り候へば、交趾のトロンカ嶽と申所、此所より大山見え申候。是達摩大師誕生の所也。是より四百里南の方へ走り候へば、占城のクワロウと申島あり。是より又南へ四百里走り東埔塞のホルコントウロウと申島あり。是より八百里乾の方へ走り候へば、マカダ國流沙川の川口也。此所迄長崎より三千八里也。

一、暹羅國流沙川の川口より、三里川上にハンテビヤと申城あり。此所にて日本より持參の御朱印改申候て、摩陀陀國の王へさうせんにて指上申候。

一、ハンテビヤより二十七里川上に、ウハヒサラと申城あり。此所にて昔空海と文珠と、智慧あらそひ被成たる所の由。此所より二十五里川上に都あり。大カイと申所也。是より流沙川の川口迄道程七十五里。

一、テヒヤタイと云寺あり。むかし須達長者の屋敷跡のよし。暹羅一國の長者也。テヒヤタイより野績を七里行て、

長さ二十里宛の堂三つあり。但此七里は日本の道程四十二町、尤日本の一里六丁あて也。堂の本尊は立像の釋迦、此堂東向也。又一舩は涅槃の像也。此堂は北向也。頭北右釋

迦の小指の厚さ三廻餘あり、是にて佛像の大き可被察。堂の柱壹本のふとさ、十五人手と手を取組、十五度廻り見候へども、漸く三分一程廻り申候。釋迦堂の軒の内に、幅八間あての町三筋有之候。則釋迦堂町と申由。右堂は佛在世の時、山を掘抜て釋尊自作の像を安置のよし。三舩共同事と云。今に至て諸人年忌の心ざし有之者は、箔を調べ尊像に

も堂にも箔を打候故、金佛の様に相見え候。此三つの堂夥敷事、高さも二十里あり。摩伽陀國の海上より見え申候。此堂を見當にして船にも乗申候。山多く候へ共海上より山

は一切見え不申候。右三つの堂見申候。都より四十里川上に靈鷲山あり。山の高さ一里、幅八町、長さ十六町あまり、此所に大岩見え候。此岩の上にて釋迦說法のよし。岩の頂に坐像のみたらしあり。都より四十二里の間、毎年三月よ

り四月末迄賣買の市立候。是より四十三里川上に座禪石とて大石あり。此岩の高さ三十二町あるよし。此岩流沙川の中へ覆かゝり有之候。諸佛座禪の所と云。諸佛の堂あり。座禪の釋迦の像あり。此石より二里川下は恒川の川口也。東埔塞と云。恒河の長さは源迄千二百里計と云。

一、流沙川より七里川上に、大カイと申都あり。是迄は唐船參り候へども、夫より川上へは法度にて不參候。但小船は參り候。此川下より川上迄の道程の事、考申者に尋候へば、往反は年ふりにて上下仕候者有之候へ共、彼川上より壇特山迄不參候由申候。奥への道の夥敷様子にて甚違候由申候。

一、チャヤロクコンヒツヒナと申所へ、都より八百里餘參候へば、ジャガタイと申所あり。此所より草の類色々出候。鮫も出候。是迄摩伽陀國の内也。是坤の方に南蠻國あり。佛狼機戔亥の方に、阿蘭陀・イギリス・スイスクワン・ニマロ・韃靼國つゞく也。

一、靈鷲山の邊に有之タチャウの木の葉、毎年一車宛出申候。高砂の十林寺と云寺に有之。タチャウの木の葉は、佛在